

コミュニティ形成過程で起きる世代間分断の現状分析と考察

— 郊外市の事例として、埼玉県戸田市調査から —

法政大学地域研究センター客員研究員 中島 ゆき

法政大学大学院政策創造研究科 岡本 義行

要旨

地域コミュニティの衰退は、現在全国的に自治体が抱える重要な課題の一つである。特に郊外都市においては、新しく移り住んだ住民や若い世代の地域への関心が低いことなどが地域コミュニティ衰退要因の一つとされている。本稿では、昨今若い世代が急激に移住してきており、特に地域コミュニティ形成に大きな課題を抱えている埼玉県戸田市を対象とし、世代ごとの地域への活動状態を調査した。その結果から、世代間で地域活動の分断が起きていることが確認された。その要因として、若い世代

への地域への関心が低いことよりも、町会などの旧来型地縁組織の閉鎖性と世代別・活動別の情報分断の2点が大きいと考察した。地域に関心のある若い世代が存在しているながらも、上手く地域活動への参加を促進できていない状況に対して、今後この2点をいかにコミュニティ活性化の政策に組み込んでいくか、示唆を与えるものである。

キーワード：コミュニティ、世代間交流、郊外市、地域活動

Analysis and examination of current state of generational divisions in community formation process

— The case of Toda City (Saitama Prefecture) as example of suburban city —

Hosei University Center for Regional Research, Visiting Fellow

Yuki Nakajima

Hosei Graduate School of Regional Policy Design

Yoshiyuki Okamoto

Abstract

A decline in local communities is one of the most significant issues involving municipalities across the nation. Particularly in suburban cities, one factor in the decline is said to be a little concern shown by those moving there and in young generations about their communities.

This research focuses on Toda City (Saitama Prefecture), faced with serious issues of local community formation, caused by recent and rapid migration of many young people into it. Researchers conducted a survey of the state of local activities among residents of different generations.

The results confirm the phenomenon of

generational divisions in local activities. This phenomenon is attributed less to a low interest among the young in their communities than to two other factors. One is the closed nature of old-fashioned neighborhood residents' associations. The other is divisions in the information accessible by people belonging to different generations or involved in different activities. This finding indicates the need to incorporate these two factors into the strategy to lead young people concerned with their communities into playing a positive role in local activities so as to energize their society.

Keyword: Community, generational divisions, suburban city, local activities

1. はじめに

(1) 問題の所在

今後の日本社会を考えていく中で、地域のコミュニティが大きな課題であることは周知の事実であり、既に多くの研究者たちの間で議論されてきているテーマである。特に昨今は、地域の多様な主体の協働を強めていくという方向性が強く強調されてきている。

まず地域コミュニティ衰退の背景として、社会現象の側面からは戦後の高度経済成長による家族形態、就業形態の変化などが挙げられている。さらに、個人意識の側面からは、余暇時間の過ごし方の変化や脱地域での友人ネットワーク形成傾向などが挙げられる。このような背景の中で、現象としては旧来型の地縁型コミュニティ（町会など）が高齢化し若い世代が参画しないことによる衰退や、若い世代の地域への関心が低くなってきていること、それ故に多様な主体による協働という活動がなかなか推進されていかない、といった点が指摘されている。

本稿では、こうした背景の中で特に郊外都市のコミュニティ再生の問題に焦点をあてる。今後の日本を考えるにあたり、郊外都市はまさに過渡期を迎えようとしている。郊外生まれの郊外育ちの世代が多くなり、今後20～30年経つと旧来型の地縁型コミュニティの活動自体を知らない世代が郊外市の中心居住者となっていく。

本稿の調査地である埼玉県戸田市でヒアリング調査を行った際に、筆者は「週末はどこに行きますか？」という質問を全員に投げかけた。すると、若い世代が口を揃え「イオン」¹と回答したのが印象的であった。回答者の多くは子どもを持つ父・母であり、彼らは家族で週末をイオンで過ごすのが日常なのである。このことは何を意味するのか。今後、郊外市生まれの郊外市育ちの子どもたちは、生まれ育った地域の原風景が一樣にイオンを中心に形成されていくことを意味する。消費活動と出来上がった箱と物に囲まれた遊びの中で週末を過ごす。そこには地域の人間関係もしがらみも存在しない。居心地は良いかもしれないが、あくまで「個」とその周辺との関係性の中だけの居心地の良さで育っていく環境でしかない。

地域コミュニティの再生には、高齢化社会の中で多様な主体が相互扶助の役割を担っていくことに期待している側面もあるが、もう一つには豊かな人間関係と地域の

文化形成を育む環境としてのコミュニティという存在も求められている。

阿部（2013）は郊外都市が未来に必要とするものとして以下のように言及している。

「田舎や都会と郊外の最大の違いは「他者への想像力」の有無である。形は違えど、田舎と都会には、自分とは異なる「他者」がおり、彼らとうまくやっていくことが、そこで生きる上での絶対条件だった。しかし、郊外には「他者」がない。いないというより、むしろそれを「ノイズ」として押することを目的として、同質的な人々が集まった郊外はかたちづくられてきたのである。＜中略＞その未来は「他者への想像力」を取り戻せるかどうかにかかっている。」（阿部、2013、P152より抜粋）

阿部が指摘するように、今後の郊外都市は「他者」との関係性をいかに育んでいける環境を作れるかが重要である。これからの数十年で生まれも育ちも郊外市の若者が増えていくこの転換期に、郊外市は自地域の特性を活かし、地域に根ざしたコミュニティ形成を具体化し実施していくことが求められている。イオンだけでなく、自分の生まれ育った地域環境特有の遊びや体験をすることで、地域とつながり地域への愛着が育まれていくものである。そして、その経験と意識を次世代につなげていくことが、今後の日本の豊かな文化形成の土台となることに異論はないであろう。そのためには、郊外都市に焦点をあて、特有の背景と環境を詳細に分析し課題を具体化していく必要がある。

(2) 本稿の目的

郊外都市の地域コミュニティ衰退に対しては、これまでの先行研究からいくつかの要因が整理されてきている。その中で、地域コミュニティを活性化していくに際し、世代間ごとに地域に関心を持つ契機が異なることを前提とし、その上でいかに世代間が分断されずにコミュニティを活性化させることができるかという点で議論を深めるものである。

そのため、埼玉県戸田市において、世代間でどのように地域への関心度合いが異なるのか、また具体的な活動状況の違いを調査し世代間が分断されている現状を分析することを目的とした。これは、単に若い世代の地域への関心の低さだけが要因ではなく、地域活動する契機が世代間で移行がされていない点に議論の焦点を置くための布石とするためである。

¹ イオンと郊外都市の関係性は三浦展『ファスト風土化する日本—郊外化とその病理』（洋泉社、2004年）により論じられたテーマの一つである。日本の風景が均一化し、地域の独自性が失われていくことを、その象徴であるファストフードにたとえてファスト風土と呼んだ。ファスト風土が生まれる環境として、郊外都市のショッピングモールの存在を指摘しており、その代表格としてイオンが挙げられている。

2. 調査対象地域の概要

(1) 位置

調査の対象地は埼玉県戸田市である。戸田市は埼玉県の南東部に位置し、東京都心から約20kmの距離にある。道路は南北に首都高速道路や国道が走り、東西に走る東京外かく環状道路と市内で交差しており、関東から日本各地への拠点として流通業が発展してきた市である。

鉄道はJR埼京線が南北に走っており、北戸田駅・戸田駅・戸田公園駅の3駅を有し、都心へのアクセスは、JRで新宿副都心へ約20分、車で首都高速都心環状線へ約30分と、非常に利便性が高く昨今は住宅地としての人気が高い地域である。

東京都境を流れる荒川堤内外は緑豊かな環境で、「彩湖・道満グリーンパーク」や「戸田ボートコース」のある戸田公園などがあり、市民の憩いの場として人気が高い。

(2) 人口構造

1966年（昭和41年）の市制施行時の人口は約5万人であった戸田市であるが、1985年（昭和60年）の埼京線開通を期に増加傾向であり、現在は13万2735人（2014年12月現在）である。国勢調査による人口推移（平成17年から平成22年）では5.47%の人口増であり、全市町村の平均である-2.87%と比べ増加率の高い自治体の一つである。2014年の1年間でも2,937人増加しており、ここ数年は急激な増加傾向にある。国勢調査（平成22年）の年代別人口構成比率は、年少人口割合（15歳未満人口）が15.1%（全国平均12.6%）、生産年齢人口割合（15～64歳人口）が69.7%（全国平均59.8%）、老年人口割合（65歳以上人口）14.3%（全国平均27.2%）であり、全国的にみて若い住民が多い特徴を持つ。戸田市の平均年齢は人口調査（平成24年）で39.4歳（前年比0.2歳増）と埼玉県内で最も低い数値が17年続いている。

ここ数年間は新しいマンション建設ラッシュの状態が続いており、駅前の開発や地区単位のまちづくり計画が積極的に進められている中、若年有子夫婦の流入が多いことが戸田市の若年層増加の要因の一つである。

3. 調査と分析の手順

まず、戸田市住民の地域活動にどのような傾向があるのかを見るために、アンケート調査を利用しその結果を分析した（4章、5章）。次いで、同調査から得られた知見をもとに、戸田市住民を対象にヒアリング調査を実施

し、具体的な属性ごとの地域活動の傾向とその意識の違いをKJ法を用いて分析した（6章、7章）。各調査の方法は各章にて記述した。

4. アンケート調査概要

(1) 調査方法

戸田市住民のどの年代層がどのように地域活動に参加しているのかを把握するためにアンケート調査を活用した。その際に、戸田市が一般的な郊外都市と同様の傾向を持つのか、または何らかの特徴を有しているのかを見るために、戸田市の福祉部福祉総務課が実施した地域住民対象のアンケートと、一都三県の住民を対象としたアンケートの2つを比較し、戸田市市民の活動量を一都三県のそれと比較することを試みた。

昨今、地域活動に関するアンケート調査は各機関で実施されており、同じような設問形態を用いているため比較しやすい状態である。しかしながら、アンケート全体の形式が異なることと、設問の言葉が若干異なること、標本属性のばらつきが一定でないことなどから、この2つのアンケートを単純に比較することは必ずしも適切であるとは言えない。

とは言え、自地域の地域活動量が果たして多いのか少ないのかを判断することは、自治体調査のレベルでは非常に難しいのが実情である。しかしながら、なんら比較対象なしに現状を判断することはできない。そこで、本節では異なる2つのアンケートデータを比較することで、戸田市市民の地域活動量の目安とする段階までを目的とした。本調査の分析はこの点を十分に留意して結果を検討したい。

今後は、このような全国との比較を視野に入れた分析手法も精査しつつ戸田市内のアンケート設計の精度向上も政策決定過程においては必要であろう点も付記しておく。

(2) アンケートの概要

一都三県調査と戸田市住民を対象とした2つのアンケートの概要をそれぞれ記す。

①一都三県調査の概要

一都三県調査は、元データにJGSS-2010²を利用した。同調査は10年間に8度の全国調査を行っている（以下JGSS）。JGSSプロジェクトは、人々の意識や行動を総合的に調べる社会調査を継続的に実施し、二次利用を希望する研究者への公開を行っている。本調査では全国調査の標本から戸田市との比較対象として一都三県のみを

抜粋した。

調査の概要は以下である。

- ・実査時期：2010年2～4月
- ・母集団：2009年12月時点で一都三県に居住する満20～89歳の男女
- ・標本数：4,500（元調査／本調査では上記母集団で抜粋した）
- ・地点数：300地点
- ・抽出方法：層化2段無作為抽出法
- ・抽出台帳：住民基本台帳
- ・留置調査票A票の有効回答数：563ケース（回収率62.2%）

基本属性は<図表1>である。

②戸田市福祉部 福祉総務課アンケートの概要

戸田市住民対象の調査は、戸田市福祉部 福祉総務課が実施した「戸田市地域福祉計画（第3期）策定のためのアンケート調査」の個票データを用いた。

調査の概要は以下である。

- ・実査時期：2012年7月
- ・母集団：戸田市在住の市民
- ・抽出方法：層化無作為抽出法
- ・抽出台帳：住民基本台帳
- ・有効回答数：634ケース（分析対象とする設問で無回答者を削除）
- ・回収：31.7%

基本属性は<図表2>である。

③分析対象の設問の相違点

JGSSからは、「設問 Q72 あなたは過去1年間に、以下のようなボランティア活動を行ったことがありますか。あてはまるものすべてに○をつけてください。」という、ボランティア活動の有無を問う設問を採用した。同設問の回答には6種類のボランティア活動が挙げられており、そのうち本分析では以下の4つを採用した³。

1. 福祉（高齢者）を対象とした活動
2. 安全な生活のための活動
3. 自然や環境を守るための活動

図表1 JGSS アンケート__標本の基本属性

		人数	割合
合計		563	100.0%
性別	男性	238	42.3%
	女性	325	57.7%
年代	20代	53	9.4%
	30代	86	15.3%
	40代	130	23.1%
	50代	82	14.6%
	60代	128	22.7%
	70代以上	84	14.9%
	就労形態	常時雇用の従業者	200
臨時雇用 (パート・アルバイト・派遣・内職)		101	17.9%
自営業者・自由業者		44	7.8%
年金生活		56	9.9%
主に家事をしている		124	22.0%
その他		29	5.2%
不就業		9	1.6%
居住形態	持家一戸建て	366	65.0%
	持家マンション	57	10.1%
	賃貸住宅	110	19.5%
	公団、社宅	30	5.3%
居住年数	生まれてからずっと	59	10.5%
	5年未満	96	17.1%
	5年～10年未満	63	11.2%
	10年～20年未満	102	18.1%
	20年以上	243	43.2%

図表2 戸田市福祉部アンケート__標本の基本属性

		人数	割合
合計		634	100.0%
性別	男性	273	43.1%
	女性	361	56.9%
年代	20代	57	9.0%
	30代	132	20.8%
	40代	151	23.8%
	50代	74	11.7%
	60代	128	20.2%
	70代以上	92	14.5%
	就労形態	正社員、正職員	202
派遣・契約社員		33	5.2%
パートタイム		88	13.9%
アルバイト(学生を除く)		20	3.2%
内職		1	0.2%
自営業・自由業(農林業も含む)		34	5.4%
家族従業者(家事の手伝い)		13	2.1%
学生		19	3.0%
無職・家事専業		202	31.9%
その他		14	2.2%
無回答	8	1.3%	
居住形態	持家(一戸建て)	254	40.1%
	持家(集合住宅)	192	30.3%
	借家(一戸建て)	10	1.6%
	借家(集合住宅)	168	26.5%
	寮	5	0.8%
	その他	2	0.3%
	無回答	3	0.5%

² [二次分析]に当たり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター SSJ データアーカイブから [「日本版 General Social Surveys < JGSS-2010 >」(大阪商業大学 JGSS 研究センター)] の個票データの提供を受けた。詳しい調査方法や抽出方法については、以下を参照。

http://jgss.daishodai.ac.jp/research/codebook/JGSS_CumulativeData2000-2010Codebook.pdf

³ 実際のアンケート用紙に記載されている文言は以下である。1. 高齢者を対象とした活動（高齢者の日常生活の手助け、高齢者とのレクリエーションなど）2. 安全な生活のための活動（防犯パトロール、防災活動、交通安全活動など）3. 自然や環境を守るための活動（新緑を守る活動、リサイクル活動、ゴミを減らす活動など）4. スポーツ・文化・芸術・学術に関係した活動（スポーツの指導、伝統文化の普及活動、知識や技術の提供など）

4. スポーツ・文化・芸術・学術に関係した活動

戸田市福祉課アンケートからは、「問 23-あなたは、この1年間、地域活動やボランティア活動、地域や住民に対する各種の支援活動等について、取り組んでいますか。(はいの人は、どんな活動をしていますか。あてはまるものすべてに○)」という設問を採用した。回答には7種類の活動が挙げられており、そのうち本分析では以下4つを採用した。

1. 福祉に関すること (児童・母子福祉、高齢者福祉、障害者福祉、その他社会福祉など)
2. 防犯・防災に関すること (交通安全・防犯、防災、消費者問題など)
3. 環境保全に関すること (自然環境保護、清掃・美化、公害防止、リサイクルなど)
4. 教育に関すること (教育、生涯学習、芸術・文化の振興、スポーツ、人権、青少年育成など)

5. 調査結果

(1) 地域活動への参加状態

①福祉に関する活動

福祉に関する地域活動については、<図表3>の結果であった。活動ありと回答した人は、戸田市アンケート調査(以下、戸田市)では全体の3.9%で、JGSSの一都三県アンケート調査(以下、一都三県)では全体の6.2%であった。

図表3 福祉に関する活動「あり」と回答した人

	戸田市	一都三県
20代	0.0%	1.9%
30代	0.0%	1.2%
40代	5.3%	6.9%
50代	5.4%	6.1%
60代	6.3%	7.0%
70代以上	5.4%	11.9%
総計	3.9%	6.2%

戸田市で最も活動割合が高かったのは60代が6.3%であるが、一都三県では70代以上が11.9%と最も活動割合が高い結果であった。特に、戸田市では20代、30代の活動者がゼロで40代(5.3%)、50代(5.4%)と年代が高くなるごとに活動者も増える傾向であった。一都三県は全年代で戸田市よりも活動者割合が高く、最も活動量に差があったのは40代で6.9%(対戸田市+1.6%)であった。

②防犯・防災に関する活動

防犯・防災に関する地域活動については、<図表4>の結果であった。活動ありと回答した人は、戸田市では全体の4.6%で、一都三県では全体の11.3%であった。戸田市で最も活動割合が高かったのは60代が10.9%であるが、一都三県では40代が16.9%と最も活動割合が高い結果であった。特に一都三県は30代の活動割合も10.5%と高く、30代、40代ミドル世代に活動量が最も差があった。

図表4 防犯・防災に関する活動「あり」と回答した人

	戸田市	一都三県
20代	0.0%	1.9%
30代	0.8%	10.5%
40代	4.0%	16.9%
50代	4.1%	9.8%
60代	10.9%	8.6%
70代以上	5.4%	17.9%
総計	4.6%	11.7%

③環境保全に関する活動

環境保全に関する地域活動については、<図表5>の結果であった。活動ありと回答した人は、戸田市では全体の7.9%で、一都三県では全体の14.9%であった。戸田市で最も活動割合が高かったのは60代の14.8%であるが、一都三県では50代の19.5%が最も活動割合が高い結果であった。また、一都三県は30代(12.8%)と40代(11.5%)の活動割合が高く、戸田市の30代(3.8%)、40代(7.3%)と比較すると、戸田市は同世代の活動量が少なく、30~50代が一都三県と差がでた年代である。

図表5 環境保全に関する活動「あり」と回答した人

	戸田市	一都三県
20代	7.0%	9.4%
30代	3.8%	12.8%
40代	7.3%	11.5%
50代	2.7%	19.5%
60代	14.8%	16.4%
70代以上	9.8%	19.0%
総計	7.9%	14.9%

④教育に関する活動

教育に関する地域活動については、<図表6>の結果であった。活動ありと回答した人は、戸田市では全体の5.4%で、一都三県では全体の9.4%であった。同設問が

これまでの設問に比べて最も一都三県との差が少ない。戸田市で最も活動割合が高かったのは40代が8.6%で、一都三県では70代以上の13.1%であった。一都三県では40代が11.5%、60代が11.7%と同程度であったが、戸田市では50代が5.4%とやや少ない傾向が見られた。また、最も差が大きいのは30代で、戸田市は0.8%、一都三県は5.8%であった。

図表6 教育に関する活動「あり」と回答した人

	戸田市	一都三県
20代	5.3%	5.7%
30代	0.8%	5.8%
40代	8.6%	11.5%
50代	5.4%	4.9%
60代	7.0%	11.7%
70代以上	4.3%	13.1%
総計	5.4%	9.4%

(2) 小括

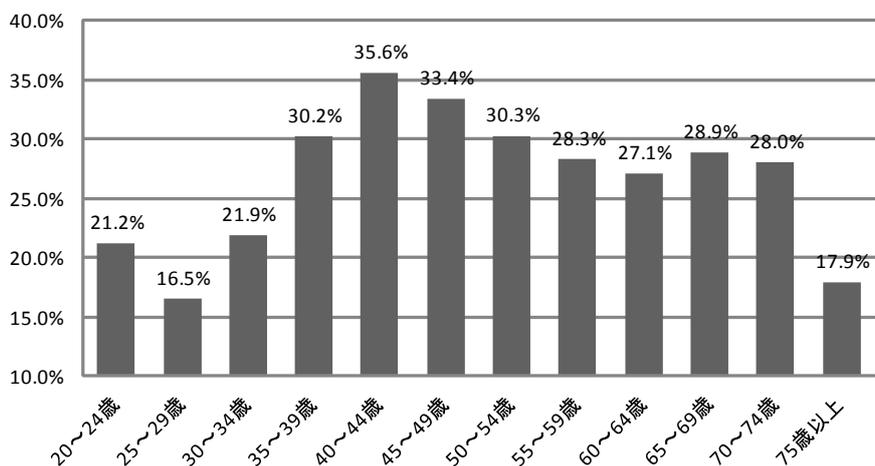
戸田市は一都三県住民と比較すると、全体的に活動者割合が少ない傾向であった。特に、一都三県では30代40代が比較的活動しているのに対して、戸田市では活

動者割合が非常に少ない傾向が見られた。30代40代のミドル世代は、昨今の全国調査からも地域活動が増えており地域貢献意識が高まってきている世代であると言われている。特に、都心部ではその傾向が徐々に見られてきている。

ヒューマンリソース研究所の調査からもこの傾向が伺える。山縣(2003)は、インタビュー調査から「ミドル男性のインタビューの中で、もう一つ特徴的だったのは、地域とのつながりを持つという積極的な働きかけが見られたこと(中略)単に地域行事に参加するだけでなく、さまざまな業種の人とのつきあいによって自分では思いつかないようなアイデアをもらったり、新たな人間関係を自ら築いていくという満足感が、彼らの仕事や生活に大きな潤いをもたらしているようだ」[山縣(2003)P39より抜粋]とある。

また、総務省「社会生活基本調査」(2011年度)の調査で、「この1年間にどのようなボランティア活動をしましたか」に対して、5～7分野の活動の参加の有無を問うたものであり、これに対して「活動をしている」と回答した人の割合を年代別に算出すると<図表7>のような結果となる。最も参加率が高いのは40代前半で35.6%、次いで40代後半の33.4%、50代前半の30.3%、30代後半の30.2%であった。

図表7 年齢別ボランティア活動者の割合(2011年度調査)



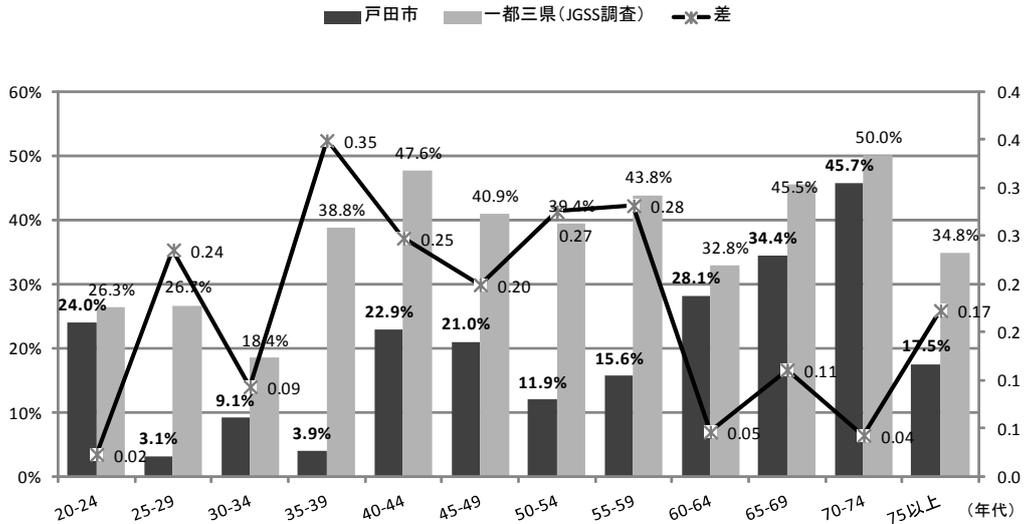
(出所)総務省「社会生活基本調査」より筆者作成

それでは、JGSSの一都三県の調査と戸田市の年代別活動者割合を比較してみる<図表8>。先の設問で、いずれかの地域活動に参加したことがあると回答した人が、その年代の中で何割いるかを算出したものである。年代別の標本数に違いがあることから、「活動者÷該当年代の標本数」とした。

その結果、一都三県では最も活動割合が高かったのが

70～74歳(50.0%)で、次いで40～44歳(47.6%)、65～69歳(45.5%)、55～59歳(43.8%)、45～49歳(40.9%)であった。30代はやや低かったものの35～39歳は38.8%が何らかの活動に参加したことがあると回答しており、前述の全国統計「社会生活基本調査」と比較して60～70代の活動割合が高い傾向であったが、35歳～49歳で一つのピークができてきている点は同様であった。

図表 8 年代別ボランティア活動者の割合__一都三県と戸田市比較



戸田市では、最も活動割合が高かったのが70～74歳(45.7%)で、次いで65～69歳(34.4%)、60～64歳(28.1%)、20～24歳(24.0%)、40～44歳(22.9%)、45～49歳(21.0%)であった。最も活動割合が低かったのは25～29歳の3.1%である。

一都三県と戸田市の活動割合の差を折れ線グラフで示した。その結果、最も活動割合の差が大きかったのは35～39歳の0.35ポイントで、次いで55～59歳(0.28)、50～54歳(0.27)、40～44歳(0.25)であった。

これらの傾向から、全国的に昨今はミドル世代が活発に地域活動しはじめる動きが確認されつつあり、一都三県のアンケート結果でも同様の傾向が示されている。しかしながら、戸田市においてはややミドル世代の活動割

合が低い傾向が見られた。戸田市は60代が非常に活発に地域活動しているものの、30代、40代、50代の活動が少ない、一部の年代と人に集中している傾向が強い可能性が示唆された。

戸田市ミドル世代の地域活動への関心はどのようなものであるのか。一都三県で同様の設問がないために比較することはできなかったが、戸田市のみアンケートで「今後、戸田市内で福祉に関わるボランティア活動や助け合い活動を行いたいか」という設問に対して(図表9)の結果が示された。

この結果から、全体の38.2%の人が「活動したい」(ぜひ活動したいと、できれば活動したいを合算)と回答しており、特に60代以外では30～34歳が「ぜひ活動し

図表 9 「今後、戸田市内で福祉に関わるボランティア活動や助け合い活動を行いたいか」という設問に対する回答。n=649

年代	ぜひ活動したい	できれば活動したい	活動したいと思わない	わからない
20-24	0.0%	48.0%	12.0%	36.0%
25-29	0.0%	34.4%	18.8%	46.9%
30-34	3.6%	41.8%	5.5%	47.3%
35-39	1.3%	37.7%	11.7%	48.1%
40-44	1.4%	37.1%	12.9%	44.3%
45-49	0.0%	28.4%	11.1%	59.3%
50-54	0.0%	31.0%	9.5%	54.8%
55-59	3.1%	31.3%	3.1%	62.5%
60-64	3.1%	45.3%	4.7%	42.2%
65-69	7.8%	37.5%	6.3%	40.6%
70-74	0.0%	42.9%	2.9%	42.9%
75以上	0.0%	26.3%	8.8%	33.3%
総計	1.9%	36.3%	9.0%	46.7%

たい」が3.6%、「できれば活動したい」が41.8%と、約半数が活動意向を示している。活動意向がやや低めであるのは、45～49歳（28.9%）、50～54歳（31.0%）である。活動意向についても、やや45～54歳が低めであった。

一般的に30代40代は中学生以下の子どもを持つ家族世帯層が多い。そのため本人の地域活動参加意欲とは別に、子どもの行事を中心に受動的に何らかの地域活動に参加しているケースが多い。全国的に30代40代の活動割合が多いのには、一つにこの要因が考えられる。また、全国や一都三県調査では50代での活動割合は一時やや減少するものの、徐々に増加傾向を示す。このことは、子育てを終え地域活動参加義務が生じなくなったことにより活動者が減ることと、定年を視野に入れ地域活動への興味・関心が拡大することの2つの要因があると言われている。世代ごとに異なる地域活動への興味や参加の意識がスムーズに移行し世代間が交流するコミュニティの形成が望ましいとされており、昨今は徐々にミドル世代の地域回帰の現象が見られ、世代間の交流と継続がなされてきている。

一般的なこの傾向に対して、戸田市の場合は特に30代の活動者割合が非常に低い。末子の年齢が未就学児であり、地域活動に参加する余裕のない世代ということが考えられるものの、末子が中学生以下であったとしても子どもを通じた地域活動への参加が全国に比べて低い傾向である。また、50代の活動者割合も全国に比べてかなり低い傾向である。このことは、子育てが一段落し子どもを通じて活動していた者がそのまま地域活動も卒業してしまっている可能性が高いことを示す。すなわち、コミュニティ形成過程において、子育て期の活動を契機としてそれ以降の地域活動に参加しない可能性が高いということである。特に、本アンケート調査の結果からは、戸田市は全国・一都三県と比較して子育て卒業以降の地域活動参加意欲が低い状況であり、コミュニティ形成過程において世代間分断が大きい現状がみてとれる。

6. ヒアリング調査概要

(1) 調査の目的

前章で推察した戸田市の世代間分断の状況が、果たして実際にどのような状態であるのか、また実際に世代間により地域活動への参加と意欲にどのような違いがあるのかを確認することを目的とした。

(2) 調査の対象

調査対象となったのは20代から70代の男女30名である。特定の集まり・集団の中で3名前後声をかけ集

まってもらった結果、8つの集まり・集団でインタビューを実施した。その集団内のメンバー同士は特に深い友人関係ではない。インタビューの当日初めて会った人、または顔は知っている程度であったり、活動で一緒だがパーソナリティは知らないといった関係性である。具体的な属性は<図表10>に一覧で示した。

(3) インタビューの方法

インタビューにはフォーカスグループインタビューを利用した。フォーカスグループはマーケティングリサーチでよく使われる方法であるが、グループ対話形式で自由に発言してもらおう手法である。筆者が話題を投げかけた後は、自然と対象者同士での会話が進み、聞き手と話し手という構図とは異なり、意見交換という形で真意を聞くことができた。

(4) 分析の方法

ICレコーダーの録音を基にした逐語的な発言記録をデータとした。全グループの逐語記録は一括して分析の対象とした。逐語記録データを意味のまとまりごとに区切り、KJ法を用いて分類した。

7. ヒアリング調査結果

(1) 発話者の属性整理

各発話者の性別、年代、就業形態、居住歴、末子の年齢で発話内容にどのような特徴が出るのかを分析した。ちなみに、居住歴については分かりやすくするために以下の3種類に分類したところ、それぞれで特徴がでた。

居住歴が10年以下の者は「近年移住者」としたところ、合計8名であったがそのうち5名は末子が未就学児で、小学生の子を持つ者が1名、成人の子が1名、子どもなしが1名であった。

居住歴が13～22年、すなわち戸田市の社会人口増の第一次、第二次ピークに移住してきた者は「人口増ピーク時移住」とした。未就学児を持つ者はおらず、小学生から大学生の子を持つ者が8名で大半を占め、それ以外は子どもなしが2名、成人が2名であった。このグループは、概ね出産や子どもが小さい時に戸田市に移住してきた者で構成されているため、居住歴13～22年経過により育児期を終えた者となった。

居住歴が30年以上または、戸田市で生まれた者は「旧住民」とした。居住歴が30年以上であるため、埼京線の開通前で古い戸田市を良く知っている層である。30代女性1名、40代女性1名の2名が生まれ地が戸田市であり、子ども時代を戸田で過ごし、現在未就学児の末子

図表 10 ヒアリング調査対象者の属性とグループ化

発話者 番号	性別	年代	職業形態	居住歴	居住形態	末子の 年齢	グループ
1	女性	20代	主に家事	4年	一戸建て	未就学児	近年移住者
2	女性	20代	主に家事	8年	社宅	未就学児	近年移住者
3	女性	30代	臨時雇用	8年	一戸建て	小学生	近年移住者
4	女性	30代	臨時雇用	8年	マンション	未就学児	近年移住者
5	女性	30代	常時雇用	8年	マンション	未就学児	近年移住者
6	男性	30代	常時雇用	5年	マンション	未就学児	近年移住者
7	女性	30代	常時雇用	4年	マンション	なし	近年移住者
8	女性	50代	主に家事	7年	マンション	成人	近年移住者
9	男性	20代	大学生	17年	一戸建て	なし	人口増ピーク時移住
10	女性	30代	主に家事	13年	マンション	小学生	人口増ピーク時移住
11	女性	30代	臨時雇用	14年	一戸建て	小学生	人口増ピーク時移住
12	女性	40代	臨時雇用	13年	マンション	大学生	人口増ピーク時移住
13	女性	40代	臨時雇用	15年	マンション	大学生	人口増ピーク時移住
14	女性	40代	臨時雇用	17年	マンション	高校生	人口増ピーク時移住
15	女性	40代	臨時雇用	17年	一戸建て	小学生	人口増ピーク時移住
16	男性	40代	常時雇用	16年	マンション	なし	人口増ピーク時移住
17	女性	40代	臨時雇用	20年	マンション	中学生	人口増ピーク時移住
18	女性	40代	臨時雇用	22年	マンション	中学生	人口増ピーク時移住
19	女性	60代	年金生活	18年	マンション	成人	人口増ピーク時移住
20	男性	60代	常時雇用	25年	一戸建て	成人	人口増ピーク時移住
21	女性	30代	主に家事	生まれ地	一戸建て	未就学児	旧住民
22	女性	40代	就活中	30年	一戸建て	小学生	旧住民
23	女性	40代	常時雇用	生まれ地	一戸建て	未就学児	旧住民
24	女性	50代	保育士	30年	一戸建て	中学生	旧住民
25	女性	60代	年金生活	39年	一戸建て	成人	旧住民
26	男性	60代	年金生活	40年	一戸建て	成人	旧住民
27	女性	60代	年金生活	45年	マンション	成人	旧住民
28	男性	60代	年金生活	生まれ地	一戸建て	成人	旧住民
29	女性	70代	未就業	40年	一戸建て	成人	旧住民
30	男性	70代	年金生活	生まれ地	一戸建て	成人	旧住民

を持つ3世代が戸田市住民である者だ。それ以外は40代以上の男女でやや年配層に偏りがでた。

(2) 発話内容からのカテゴリー化

インタビューの結果、意味をラベル化できた発話は245抽出された。インタビューの際に地域活動の参加状態や地域に対する関心を問いかけた結果、「どのような地域活動にどれくらい参加しているか」という発言と、「地域に対して貢献意識や当事者意識（改善した方がよいと思っているなど）がどの程度あるか」という発言で〈図表 11〉のカテゴリーに分類された。

(3) カテゴリーの概念と抽出内容

①地域への関心〈高い〉

同カテゴリーは地域に対して何らかの前向きな考えを持っているかないかで分類され、〈高い〉〈低い〉に分けられた。さらに地域への関心が〈高い〉カテゴリーは2種類に区分された。「1. 積極的な改善意識」では、戸田市の現状で改善した方がよいと思っている点が発言に挙がった。主に他地域との比較や自分自身の仕事の経験などからくる体験と比較していることが多いのが特徴である。「(自転車事故が多いということで)じゃあ具体的にどういいうシチュエーションでそういう事故が起きたのかわからない中で、戸田市は事故が多い多いと問題視さ

図表 11 発話からのカテゴリー化

大カテゴリー	小カテゴリー	定義
地域への関心	1.積極的な改善意識	自らの体験や経験から、戸田市の課題を考え「もっとこうしたらいい」と考えている。必ずしも改善策を持たずとも思考している。
	<高い>	
	2.周囲の状況次第	周囲の地域活動への参加者次第で、自らの行動を決めるケース。自分自身の明確な地域への意見はないものの、何らか貢献しようという意識は持っている。
	3.負担感	地域活動への参加経験を持っており、その経験から負担感を強く感じている。地域への貢献意識が全くない訳ではないものの、活動による負担の大きさと地域への貢献意識が低下している。
<低い>		
	4.地域を考えたことがない	「地域」ということ自体を考えたことがないケース。地域にはむしろ居心地の良さを感じているものの、自らが活動することは考えたことがないケース。
地域活動	5.ボランティアなど主体的に参加	主体的に地域の活動に参加している。参加の方法は異なるが、町会、ボランティア団体など、何らかの活動団体に所属している。
	<多い>	
	6.子どもの関係で主体的に参加	主に、子ども関係の活動で主体的に活動している。それ以外の活動については、意識的に活動範囲を広げるまでには至っていない。
	7.子どもの関係で義務的に参加	主に、子ども関係の活動については義務的に参加している。子ども関係でなければ、他の活動にはあまり参加する意思がない。
<少ない>		
	8.ほとんど活動なし	地域活動する機会がないケース、いずれの団体にも所属していないケースで、現時点でほとんど地域活動をしていない。

せるが、何が多くの？と。この点をもっと明確にして具体的な対策をやっていかないとと思う（発話者6）、「地域外から移住して新しくマンションに住んでいる身分だけど、町全体の建設計画の構想があって、その上で人を呼ぶような、土建の力が強いのではないか。構想を持ったうえで街づくりをして欲しいと思う。（発話者16）」などがあつた。

対して「2. 周囲の状況次第」では、具体的な問題意識は持っていないものの、なるべく地域に貢献していこうという意識が垣間見られた発言である。「何かボランティアをやりたいと思った時に、どんなグループがあるのかとか、どうやって調べればいいのかわからない。（発話者17）」や「町会の人に申し訳ないなとは思ふ。時間に余裕ができたなら、やってもいいかな、でもその時の自分の状況によるかな。（発話者5）」などがあつた。周囲の人が一生懸命やっていることにはなるべく協力したいという意識や、ボランティアなどの地域活動が自分自身の生きがいとして捉えられているケースとあり、地域自体の課題を考えるというより、自分自身の状況からの関心であつた。

②地域への関心<低い>

同カテゴリーでは2種類に区分された。「3. 負担感」では、主に町会などに参加した経験から、その活動量の

多さに対する負担が大きいという意識であつた。地域自体に問題意識がある訳ではなく、町会の活動に対する意見に集約された点の特徴である。主に「町会も、PTAも、まわってきたらやるけど、それも義務的。（発話者3）」、「若いお母さんだからと言って、仕事をどんどん振られてしまう。正直言うと面倒。（発話者12）」、「町会の活動まではいけない感じ。9：1ぐらいで助けるぐらいならいいんだけど、10にはなれない。（発話者13）」などの発言であつた。

「4. 地域を考えたことがない」では、そもそも地域を考えたことがないという発言であつた。「（自分のマンションには）100人近く子どもがいる。マンション内に保育園が完備されているから、余計外のひととの交流がなくても平気。（発話者21）」、「う～ん、あんまりよくわからないですね。（発話者1）」などであつた。

③地域活動<多い>

同カテゴリーでは3種類に区分された。「5. ボランティアなど主体的に参加」では、町会をはじめ何らかの団体に所属するなどして自主的に活動している層である。「ボランティアで人の役に立てて、自分の体も動かせるのでとてもやりがいがある。（発話者27）」、「広報や、個人でボランティア登録をしていて社協から紹介された（発話者26）」などであつた。

「6. 子どもの関係で主体的に参加」では、町会や子ども会、PTAなどで地域活動に参加している層である。子ども関係の活動に主体的に参加しており、それにかなり時間はとられているものの、特別負担であるという感想は持っていない層である。「町会とかだと、あれもこれもやらなくてはならないので、できれば自分の興味のあること（子ども関係だけ）を選んでできればいいのだけど。(発話者24)」、「たまたまPTA役員で活動をはじめたけれど、意外と楽しくやっている(発話者11)」、「順番だから、入ったらやらなくちゃいけない。うちの親も活動的な人たちだったから、やらなくちゃ、そういうもんだという感覚があった。(発話者23)」などであった。

「7. 子どもの関係で義務的に参加」では、時期的に子ども関係の活動が生じているため仕方なく活動しているが、できればあまりやりたくないという意識が垣間見られた発言であった。「子どもが小学校の時は、子ども会もあって、お祭りなどで参加していたけど、子どもが大きくなると町会とはコミュニケーションは全くなくなってしまう。(発話者14)」、「何かからめとられるというか、束縛されているイメージがある。(発話者17)」、「町会や子ども会は、役員をやらなくちゃいけないのが前提となっているので、だんだん親の方が参加させたくなく

なってきた。」「(発話者18)」、「しょっちゅう集まらなくちゃならないというのが、面倒。(発話者18)」などであった。

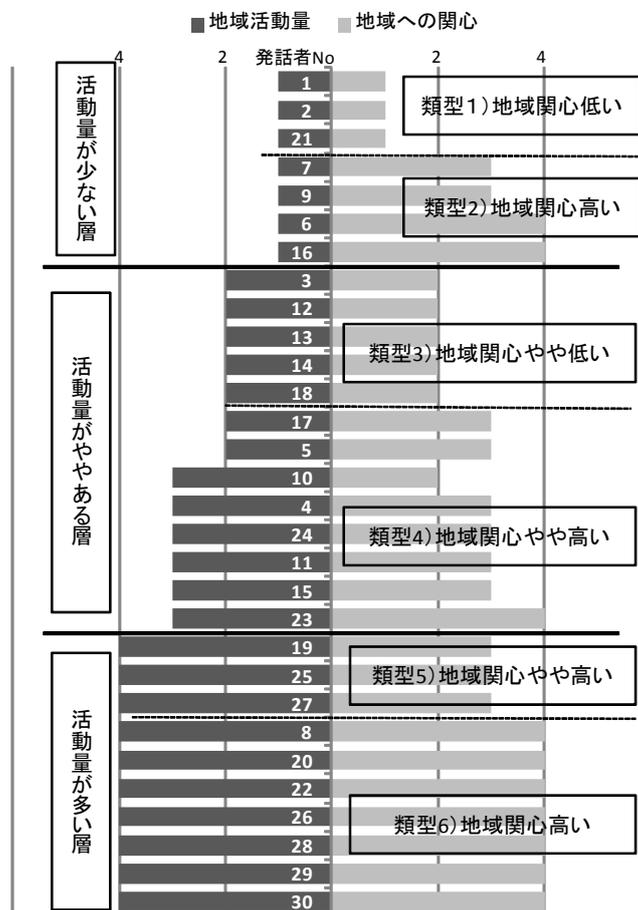
④地域活動<少ない>

同カテゴリでは1種類のみ、「8. ほとんど活動なし」であった。現在具体的な活動を起こしていない層であり、活動意向とは別であるのが特徴的であった。活動意向のあるなしで発言内容は異なる。「地域に対して、何か思っていたとしても、具体的にどこで何を発信しているかわからない。(発話者7)」、「今までの自分のスタンスで、声かけて、人に積極的に参加させられるのは嫌だろうから、とりあえず自分ひとりでも拾ってみようかと思っている(発話者6)」など、活動するきっかけやタイミングがなく活動していない層の発言であった。対して「今は子どものことだけで手いっぱい余裕がない。(発話者2)」、「マンションの人だと、やっている人がいない。(発話者21)」など、活動そのものに参加する意欲がない層の発言があった。

(4) 地域活動と地域への関心による、発話者の類型

地域活動と地域への関心に対する発話内容で発話者を

図表 12 発話内容による発話者類型



分類したのが<図表 12>である。地域への関心については「1. 積極的な改善意識」が最も関心が高いとして4とし、「4. 地域を考えたことがない」が最も関心が低いとして1として図表の右部にグラフ化した。地域活動については、「5. ボランティアなど主体的に参加」が最も地域活動が多いとして4とし、「8. ほとんど活動なし」は最も地域活動が少ないとして1として図表の左部にグラフ化した。各発話者の地域活動量が少ない順に並べ、大きく6種類に分類された。

(5) 各類型の特徴

類型ごとに、発話者の属性とその発話内容からその特性を記述する。

類型 1) 地域活動少／地域関心低い

同類型に分類されたのは、発話者 1、2、21 である<図表 13>。全体からすると該当割合は少なかったものの、全て「主に家事」を行っている主婦層で、末子年齢が「未就学児」の子を持つ 20 代、30 代の女性に集中した。

図表 13 「類型 1) 地域活動少／地域関心低い」の個人属性

発話者番号	性別	年代	職業形態	居住歴	居住形態	末子の年齢	グループ
1	女性	20代	主に家事	4年	一戸建て	未就学児	近年移住者
2	女性	20代	主に家事	8年	社宅	未就学児	近年移住者
21	女性	30代	主に家事	生まれ地	一戸建て	未就学児	旧住民

発話の内容には<図表 14>のように、地域の施設を満喫しており、現在の居住環境にも満足している発言が多く見られた。地域に関する質問を投げかけた場合、概ね施設環境の良さや利便性についてプラスの回答が多く発言されたが、具体的な課題などは一切聞かれなかった。地域活動については「主人は東京に勤めに出ているため、日頃は戸田を不在にしているから地域との交流ができないのではないか」、「今は余裕がない」など、やや自分の日常生活と距離感のある発言であった。この属性の特徴として、未就業者であり未就学児の子どもを持つ母親であることから、行動範囲が同じパターンを示し

ていることが挙げられる。多くは平日昼間に子どもたちを遊ばせられる子どもひろばや、児童センター、近所の公園を活動の中心としており、週末はショッピングセンターで遊ぶというパターンである。そのためか、将来自分が町会に所属することや、地域活動をしているイメージがわからないという。10年後20年後のイメージを聞くと「あまり考えたことがない」と3者とも同様の様子を示した。身近に異なる年代や別行動パターン生活者がいないことで、将来的な就職の厳しさや地域活動に生きがいを見出す活動などは全くイメージができない様子であった。

図表 14 「類型 1) 地域活動少／地域関心低い」の発話

	子どもはひろばが大好き。先生の数も多いので、子育てひろばはいつも活用してる！（発話者1）
地域満喫	保育園、公共施設など使いやすい施設も多く離れることを考えたことはない。特に児童センターのプリムローズは、3歳までしか入れない部屋や屋内もあり、イベントも多く、天候に左右されずに遊ぶことができる。（発話者2）
	広報は盛りだくさんで毎月チェックしている。広報の設置場所を増やしても良いと思う。（発話者21）
地域に対して	週末にはショッピングセンターに行く。ららガーデンには赤ちゃん本舗が入っている。イオンは土日に無料で送迎バスが出ている。2歳児位から遊べる作りになっていて小学生向けのイベントも多い。フードコートも助かる。（発話者21）
	主人は東京に勤めに出ているため、日頃は戸田を不在にしているから交流ができないのではないかと。（発話者2）
	う～ん、今は全く考えられない。毎日がいっぱいいっぱい、余裕がないです。（発話者1）
	全く考えたことがない。（発話者1）
将来イメージ	う～ん、あまりイメージがわかりませんね。（発話者2）
	正直、あんまり考えたくないって感じですかね（笑）（発話者21）

類型 2) 地域活動少／地域関心高い

同類型に分類されたのは、発話者 6、7、9、16 である<図表 15>。地域関心が最も高いのは発話者 6、16 であった。この属性の特徴としては、9 の大学生を除き常

時雇用で働いており、子どもがいないか未就学児の子を持つ 30 代 40 代の男女であることだ。特に、地域関心が最も高い 6、16 は男性である。

図表 15 「類型 2) 地域活動少／地域関心高」の個人属性

発話者番号	性別	年代	職業形態	居住歴	居住形態	末子の年齢	グループ
7	女性	30代	常時雇用	4年	マンション	なし	近年移住者
9	男性	20代	大学生	17年	一戸建て	なし	人口増ピーク時移住
6	男性	30代	常時雇用	5年	マンション	未就学児	近年移住者
16	男性	40代	常時雇用	16年	マンション	なし	人口増ピーク時移住

地域関心が高いものの、実際には地域活動に参加していない類型であるが、どのような状況で参加していないのか、発話の内容<図表 16>から分析した。まず参加機会であるが、「何かやると言われればやるんだけど、

きっかけがない(発話者 16)」や、「誰にどこに何を言えればいいか、わからない。(発話者 7)」などのように、地域活動するためのきっかけや入口がわからないという発言であった。

図表 16 「類型 2) 地域活動少／地域関心高」の発話

参加機会	<p>町会の集まりがある時はなるべく顔を出すようにしているんですが、ゴミゼロ運動のことは全く話題にあがらないですね。たまに放送がはいて、あ、今日やるんだみたいな。でもどうやっていいのかわからないんですね。ゴミ袋とかはどこでもらうんですか？(発話者 16)</p> <p>僕は町会にも出ているので、何かやると言われればやるんだけど、きっかけがない。(発話者 16)</p> <p>もっとこうしたら、と思っても、誰にどこに何を言えればいいか、わからない。(発話者 7)</p> <p>周囲に声かけることを今はなるべく避けている。人に言われると断りにくいだろうから、無理矢理参加させられるの嫌だろうと思うので、とりあえず自分ひとりでやれることはやってみようかと。(発話者 6)</p>
町会との付き合い方	<p>マンションに入居する時に、町会費の話とかあったかもしれない。マンションが中心だから、地域の町会自体と接点がない。(発話者 7)</p> <p>町会入っちゃうと全ての行事に参加しなきゃいけないっていう雰囲気とかが出てきて、それが嫌な方もいると思うんですよ。例えば、戸田市方式とか勝手に名前をつけて、戸田市がイニシアチブをとってもいいんですけど、今町会活動でも何でもいからひとつの行事に参加しましょうっていう一人事業運動みたいなのをやって、その住民の意識っていうのをそこで高められればなど。要は全部やんなくてもいいけど、一個でも参加できませんか、自分の興味のあるものだけ、って戸田市にするのも義務じゃないですけど、そういうのやってもいいのかなって。そうすれば自分の興味あることにだけ、一個だけやろうって。そういう風に出来ないかなって(発話者 6)</p>
他のまちや自分の仕事経験から	<p>都内に通っている段階では。いざ実際地元を目を向けてみると、何か、物足りない感というか、もっとこうすればイイんじゃないの？という。それやるにはもう少し街が成熟して、皆が同じような方向を見出さないと無理なのかもしれないんですけど。(発話者 6)</p> <p>町全体の建設計画の構想があって、その上で人を呼ぶような、土建の力が強いのではないかな。構想を持ったうえで街づくりをして欲しいと思う。(発話者 16)</p> <p>政機関、文化会館などが密集していて利用しやすい。他の市と比べて、非常に使いやすい町。何か思っていたとしても、具体的にどこで何を発信していいかわからない。情報の発信というか、昔の人たちの阿吽の呼吸みたいなものだけでなく、システムチックに参加できる方法があるといいと思う。(発話者 7)</p>

戸田市の一つの特徴として町会が活発であることが挙げられる。どこで情報を入手していいかわからない、という発言はマンション居住者から多く見られた。町会とマンションとが別の活動をしている地区が多いためか「居住人数の多い場合、独自で自治システムを持っているマンションが多い。その中で町会担当が1年ごとに担当制になっており、その担当者しか町会との付き合いがない。町会担当も結構仕事が忙しく振られて、嫌がる人が多い。(発話者6)」というように、マンションと町会との距離がある。そのため、関心の高い人でもマンションに居住していると地域活動の入口としての町会との付き合いが生まれず、なかなか最初のきっかけが掴めない様子が見られた。年配者の中からは「マンションの人はそもそも町会に入らないとか参加しないのが前提と思っているから最初から声をかけない。いろいろ言っても嫌がられるのもわかっているし」という発言もあった。ヒアリング対象者の地域からは、マンションと町会とを繋ぐ接点及管理組合であったり一部の担当者のみであったり、そこから各戸別に情報がいかない仕組みとなってしまう様子が伺えた。同時に、町会については発

話者6のように活動の負担が大きいことを知っており、参加しにくい状態であるという発言も挙げられている。

一方で、類型2に分類された人たちは、地域に対しての質問をすると様々な点の課題が挙げたのが特徴である。「何か物足りない」「町全体の設計計画」「システムチェックに」といった戸田市全体の運営や方向性についての大局的な課題を挙げる人がほとんどであった。彼らの発言に共通しているのは、自治体のHPでの発表や地域の新しい地区整理の話題などの情報収集を自らしていたことである。その上で自身の他地域での居住経験や職場での経験から、戸田市を比較している視点であり、地域のマネジメント部分の課題を見ている背景が伺えた。

類型3) 地域活動ややあり／地域関心やや低い

同類型に分類されたのは、発話者3、12、13、14、18である<図表17>。この属性の特徴としては、発話者3を除いて人口増ピーク時移住のマンション居住者で、末子の年齢が中学生以上の子を持つ30代、40代女性であることだ。全員が臨時雇用で戸田市内にパートで働いていた。

図表17 「類型3) 地域活動ややあり／地域関心やや低い」の個人属性

発話者番号	性別	年代	職業形態	居住歴	居住形態	末子の年齢	グループ
3	女性	30代	臨時雇用	8年	一戸建て	小学生	近年移住者
12	女性	40代	臨時雇用	13年	マンション	大学生	人口増ピーク時移住
13	女性	40代	臨時雇用	15年	マンション	大学生	人口増ピーク時移住
14	女性	40代	臨時雇用	17年	マンション	高校生	人口増ピーク時移住
18	女性	40代	臨時雇用	22年	マンション	中学生	人口増ピーク時移住

特徴的だったのは、地域に対する意見を求めた際に町会の話者が非常に多く出たことである。子どもが中学生以上で、最近では町会と連動した子ども会の参加もなくなってきたが、かつては町会活動や子ども会を通じて地域に参加していた者たちである。その時の経験による発話であるが、プラス印象の発話がほとんどなかった点が共通している。発話内容<図表18>を見ると、その多くが「仕事量が多い」「押し付けられる」という負担感を持っていた。さらに「昔からのつながりでやっている人が多い(発話者18)」「動いてくれそうな人(発話者14)」という発言から、「自分とは違う(発話者14)」誰かがやってくれるものであるという意識を持っていることが背景に見える。すなわち、自分が積極的に参加意欲はないものの、やる必要があればやるという義務的なスタンスである。しかしながら、一方で「協力してくれる人がいるかいなか(発話者18)」「9:1ぐらいで助けるぐらいならいい(発話者13)」のように、非協力的である訳

ではない。同類型からは地域に対する発言がほとんどなかったことから、非協力的ではないが周囲の人と足並みを揃えて他の人がやっていることには自分も参加しなくてはといった、地域貢献意識よりも人と同じ行動をとる感情の現れとも言える。

類型4) 地域活動ややあり／地域関心やや高い

同類型に分類されたのは、発話者17、5、10、4、24、11、15、23である<図表19>。この属性の特徴としては30代、40代の女性を中心で、末子の年齢が中学生以下ということである。末子の年齢が中学生以下の母親の年代は、日本の育児休業制度が急速に変化し、育休を取得しやすくなってきている年代である。現在、高校生、大学生の子どもを持つ母親たちは全体の半数以上が育児休業制度を使わずに退職していた年代である⁴。このことは、子育てによってこれまでの仕事を退職する女性と、これまでの仕事を一時休業する女性とで考え方の相

図表 18 「類型 3) 地域活動ややあり／地域関心やや低い」の発話

	頼まれたら、数回だったらいいけど。。。。継続的にやるのは、とっても負担。(発話者3)
	町会は順番が回ってきたときにちょっとやるだけ。一度参加すると、次に断りにくい雰囲気があるから、なるべく顔を出したくない。(発話者12)
町会に対する 負担感	子どもが小学校の時は、子ども会もあって、お祭りなどで参加していたけど、子どもが大きくなると町会とはコミュにてケーションは全くなくなってしまう。子どもが大きくなって積極的に参加しようとは思わない。特に若いお母さんだとあれこれ押しつけられる。(発話者14)
	子ども会で理事会に参加した時に、婦人会や老人会があって、そこに参加を勧められたけれどちょっと嫌だった。子ども会の時には婦人も老人会もいろいろやってくれているので、ちょっと申し訳なかったんだけど。(発話者13)
	町会や子ども会は、役員をやらなくちゃいけないのが前提となっているので、だんだん親の方が参加させたくなくなってきちゃうケースもある。(発話者18)
誰かが やるだろう	町会でバリバリ動いてくれそうな人は、既にまわりにいる。あの人、将来町会長とかやってくれそう、みたいな雰囲気の人が出て、何となく決まってくる感じがする。何となく自分とは違うかな〜と。(発話者14)
	旦那たちはつながりがいいから。今の町会さんたちは、昔からのつながりでやっている人が多いから、そういう中に入っているイメージはない。(発話者18)
分担ならいい	協力してくれる人がいるかいないかによっても違うかもしれない。その時の町会や集まりの雰囲気によって違うけど、一人で何かをやらなければならぬとしたらちょっと難しいかな。(発話者18)
	町会の活動まではいけない感じ。9:1ぐらいで助けるぐらいならいいんだけど、10にはなれない。(発話者13)
将来のイメージ	子どもの手が完全に離れたら、何かやりたいなどは思うんだけど、今はあんまりイメージがわかない。(発話者3)
	若い時はあまり将来のことを考えなかったけど、このぐらいの年齢になると将来の心配をしはじめて、仕事は絶対に続けておかなきゃと思うようになった。(発話者13)

図表 19 「類型 4) 地域活動ややあり／地域関心やや高い」の個人属性

発話者 番号	性別	年代	職業形態	居住歴	居住形態	末子の 年齢	グループ
17	女性	40代	臨時雇用	20年	マンション	中学生	人口増ピーク時移住
5	女性	30代	常時雇用	8年	マンション	未就学児	近年移住者
10	女性	30代	主に家事	13年	マンション	小学生	人口増ピーク時移住
4	女性	30代	臨時雇用	8年	マンション	未就学児	近年移住者
24	女性	50代	保育士	30年	一戸建て	中学生	旧住民
11	女性	30代	臨時雇用	14年	一戸建て	小学生	人口増ピーク時移住
15	女性	40代	臨時雇用	17年	一戸建て	小学生	人口増ピーク時移住
23	女性	40代	常時雇用	生まれ地	一戸建て	未就学児	旧住民

違なり地域と関わる時間の相違があることを意味している。同制度がなかった世代（あったとしても制度を取得しにくい雰囲気があり取得率が低かった世代）は、出産を機に退職をすることが一般的な考えであった。それに対し、育児休業制度の利用者が増えた世代に出産した女性は選択肢が増えたことになる。これによって必然的に、子育て期の女性が子育て中心とするか、仕事と両立するかを様々な環境とのバランスをとりながら自分自身で決

定する必要がでてきた訳である。同類型の中でも、主に家事で未就業の人は発話者10のみで、それ以外は子育てしながらの就業者である。全8名のうち、半数の4名は出産前と同じ職場かまたは同じ職種で時短で就業している継続者であった。一般的に有子の就業女性は時間的な拘束があり地域活動に参加しにくいのではないかと推察されるが、逆に類型3よりも活動量は多い。また、発話の内容も町会に対する負担感を発言する人が少ないの

⁴ 女性が育児休業制度を取得する割合が5割を越えたのは平成11年度以降である。平成22年度調査では、育児休業制度を利用し尚且つ就業を断続している割合は45.7%である。(厚生労働省「平成24年度雇用均等基本調査」より)

が特徴であった。すなわち、一般的に時間がないことが地域活動の妨げになると思われるが、実際にはその逆の傾向である可能性がある。それでは、具体的な発言内容からその傾向を分析する。発言内容を分類し、特徴的な発言内容を一覧にした結果<図表 20>では、全体的に町会に対する肯定的な発言が多く見られたのが特徴的であった。むしろ、「やってもいいかな（発話者 5）」、「やるもんだと思っていた（発話者 11）」、「よかった（発話者 15）」など、積極的な参加意欲を示す発言が多く聞かれた。

特に、発話者 23 は生まれ地が戸田市で両親が地元で商売を営んでおり、自身が小さい時から両親が地域活動に積極的に参加している姿を見て育ったという。そのため、「やるもんだ」という感覚であり、役員も立候補するという。町会に対する負担感については、発話者 4 と 17 からのみ具体的な発言があり、それ以外の多くは確かに一部は負担であるが、やりたくないという発言はなかった。時間的に集まりが平日昼間であるため、「やれない」という感覚の方が強かった。

地域関心については、具体的な地域課題を考えている人はほとんどいなかったが、発話者 23 のように住民参加したいといった意欲や、駅前開発についての情報収集をしているなど、関心が低い訳ではない。10 年後 20 年後のご自身の将来イメージについて聞くと、「何かやりたい」と考えている人が半数以上おり、仕事の延長線上で自分の経験やキャリアを生かしたいという意識が多く見られた。全体的に類型 1、3 と比較して好奇心がありいろいろな方面にアンテナを張っているが地域という単位では考えておらず、自分自身の興味・関心を中心である傾向が見られた。

類型 5) 地域活動が多い／地域関心やや高い

同類型に分類されたのは、発話者 19、25、27 である<図表 21>。この属性の特徴は 60 代女性で年金生活者ということである。発話者 19 が人口増ピーク時移住者で、25、27 は 40 年近く戸田市に居住している旧住民である。ここ数年の戸田市の急激な変化についての発言も聞かれ、「地域の交流が少なくなった」というコメント

図表 20 「類型 4) 地域活動ややあり／地域関心やや高い」の発言

	時間に余裕ができれば、やってもいいかな、でもその時の自分の状況によるかな。(発話者5)
	子ども会ではボーリング大会やカルタ会とか、クリスマスやお正月などなんやかんやとありますね。やるもんだと思っていた。確かに時間はとられるけど、順番だし一時的なものという感じ。(発話者 11)
やってもいい	周囲に押し上げられる感じで役員をやったけど、結果的によかった。いろいろな知り合いもできたし。役員とまではいなくても、何らかに参加しているとメリットもあると思う。(発話者15)
	ゴミゼロ運動みたいに、できる人が参加するという活動があるのがよい。近所の小さい子は親子で拾ったりしている。あまりうるさくない、やれやれと強制的でないのがいい。(発話者24)
	役員は基本的にそれほど嫌ではないので、どちらかという好きです。立候補もしますよ！それは順番だから、入ったらやらなくちゃいけない。うちの親も活動的な人たちだったから、やらなくちゃ、そういうもんだという感覚があった。(発話者23)
町会に対する負担感	町会とかだと、あれもこれもやらなくてはならないので、できれば自分の興味のあることを選んでできれば。(発話者4) うちは子ども会には入れなかった。土日に子ども会の用事ができちゃうと何もできなくなってしまうので、遊びも父親があちこち連れていってくれるから、子ども会はいいかなと。(発話者 17)
地域への意識	行政からの住民参加みたいなものに声がかかったら、是非参加したい。(発話者23) 駅前の開発が、話にはあがっていたらしいが、地主さんが動かなくて結局手つかずのまま。いろいろ話し合いがあったみたいですが、結局どういう結果になったのかよく分からない。もっと駅前がにぎやかになればいいのと思う一方で、駅から離れた商店街の人は大変だという話も聞く。他の地域はどうしているんですかね？(発話者 23)
将来イメージ	これまでの経験を生かして、仕事としてやりたいことがある。(発話者17) もう少ししたら、もっと仕事がしたい。(発話者11) もっと別のことをしてみたいですね。(発話者23) 子育てが一段落して、もう少し時間ができれば活動を増やそうと思っている。(発話者15)

であった。共通していたのは、町会活動よりも、ボランティア活動に積極的な姿勢である。個人的にボランティアセンターに登録しており、何かしら活動していた。

発話内容<図表 22>で特徴的なのは、活動のきっかけが年齢的なこと、年金生活に入り家に閉じこもっていないために、というものであった。ボランティアの活動も自分がこれをやりたいというよりは、自分にできることで人に役に立つことができるという「生き甲斐」としての意識が強く見られた。地域で何か課題があるかという質問に対しては、あまり具体的な回答は出なかった。どのインタビューグループでも、地域の話題の際には町会活動についてのコメントが挙がるが、同類型の発話者は全員が町会に所属しているものの自分自身の町会での活動の話題は挙がらなかった。また、地域に対しての課題も具体的なものは挙がらず、ボランティア活動で自分自身が人の役に立ち達成感がある様子が中心の発話であった。

類型 6) 地域活動が多い／地域関心高い

同類型に分類されたのは、発話者 8、20、22、26、28、29、30 である<図表 23>。この属性の特徴は 60 代、70 代の男性と女性を中心に一戸建てに居住する旧住民が多いことである。年金生活者が中心であるが、それ以外の人も発話者 8 の 50 代女性は「退職して膨大な時間を手に入れたら何かをやらう」と思っており、発話者 20 の 60 代男性は「近い将来の年金生活を考えて」と退職後の生活をイメージしながら地域活動に参加しているのが特徴であった。唯一 40 代女性の発話者 22 は現在就職活動中であるが、地元で開業を視野に入れており地域に対する関心が高いという属性であった。

同類型の者は全員が町会に参加しており、その他の活動も積極的である。活動への参加のきっかけは「地元のつながり」の発話に代表されるように<図表 24>、「商工会がらみ」や「知人」、「市民大学で同じ地域の人などもいて」など、地域で何かしらの関係性を持っている人

図表 21 「類型 5) 地域活動が多い／地域意関心やや高い」の個人属性

発話者番号	性別	年代	職業形態	居住歴	居住形態	末子の年齢	グループ
19	女性	60代	年金生活	18年	マンション	成人	人口増ピーク時移住
25	女性	60代	年金生活	39年	一戸建て	成人	旧住民
27	女性	60代	年金生活	45年	マンション	成人	旧住民

図表 22 「類型 5) 地域活動が多い／地域関心やや高い」の発話

	孫が生まれて、もっと元気でいないと思ひ、積極的に外に出るようになった。(発話者19)
活動のきっかけ	初めのきっかけは、目も弱くなったし別のことを始めないとならないなと感じた。ちょうど更年期に重なりウダウダしたが、躊躇なくボランティアを始めている。(発話者25)
	家に入ってしまうと外に出られなくなってしまふ。何かやらなくては思っっているが、始めの一步が踏み出せなかつた。友だちに誘ってもらってボランティア活動に登録してみた。(発話者27)
生き甲斐	孫のこともあって子ども関係のボランティアをやっている。子どもと接していると元気をもらえる。(発話者19)
	参加しはじめてから、いろいろなお友だちも増えて、毎日が楽しい。働くには年齢的にも体力的にもきついが、ボランティアなら自分のできること、自分のペースでいい。(発話者25)
	ボランティアで人の役に立てて、自分の体も動かせるのでとてもやりがいがある。(発話者27)

図表 23 「類型 6) 地域活動が多い／地域関心高い」の個人属性

発話者番号	性別	年代	職業形態	居住歴	居住形態	末子の年齢	グループ
8	女性	50代	主に家事	7年	マンション	成人	近年移住者
20	男性	60代	常時雇用	25年	一戸建て	成人	人口増ピーク時移住
22	女性	40代	就活中	30年	一戸建て	小学生	旧住民
26	男性	60代	年金生活	40年	一戸建て	成人	旧住民
28	男性	60代	年金生活	生まれ地	一戸建て	成人	旧住民
29	女性	70代	未就業	40年	一戸建て	成人	旧住民
30	男性	70代	年金生活	生まれ地	一戸建て	成人	旧住民

がその関係から発展したケースが多い。

地域に関する話題で最も多かったのは住民のマナーに関する発言で、自転車や挨拶、ごみなどに関するもので、身近な生活の中で嫌な体験からくる問題が主である。それに対して、「畑が少なくなった」や「地域でのつながりが少なくなって寂しい」といった意見も聞かれた。地域活動に積極的に参加しているため、地域情報を把握しており、どんな人がどこで何の活動をしているのか、他

の地域の町会はどうであるかなど、全体的なつながりを持っているのが特徴である。

また、全員が町会に参加しており町会自体に対する意見は少なく、逆に町会とその他との関係性に関する発言が多かった。このことは、他の類型で町会に対する負担感や入りにくさが拳がっていたのに対し、町会当事者としての発言である。もっと多くの人に参加して欲しいが、どうしたら参加が促進されるかは具体策にはなっていない。

図表 24 「類型 6」地域活動が多い／地域関心高い」の発話

	昔から商工会がらみで地域の活動をやっていて。地元で商売をしているので(発話者26)
地元のつながり	知人で要支援の方が家事の支援を受けられなくなってしまった事態があって。それがきっかけで手伝いをしていたりして、それ以外にどのようなボランティアがあるのか知りたかった(発話者8)
	最初は定年退職して暇だったから、市民大学ってのがあったので面白そうだと顔を出したら、同じ地域の人もかもいて、何となくそこから(発話者25)
	小さい市に駅が3つもあるのが、他の市に比べてすごいことなので、いろいろできそうな気がするのに、何か生かし切れていない感じでもったいない。(発話者22)
	お祭りなどのイベントに近所の人参加がないので、もっと宣伝してくれればいいのに。もっとみんなを巻き込んでやってくれればいいのに。(発話者22)
地域の課題	自転車の事故が戸田市は多いけど、学校なんかで講習もやっていてね。講習を聞いて初めてわかったことがあるんですけど。例えばね、横断歩道を自転車で乗ったままいっちゃいかんと。そういうことをね、講習を受けないとわかんないんですよ。子どもだけでなく、全体でやった方がいい。(発話者30)
	まちを案内しようっていう活動があるんですよ。こうした活動も何人かの地元の人で固まっちゃってる。地元の人のシステムなんだよね。逆に組織力はあるんですけどね。新しくできたマンションの人とかと接点がない。もっと若い人が地域のことを考えるようにしなくちゃいけない。(発話者28)
	水はけが悪い地域は多い。市議員には環境に優しいまちづくりを掲げている人がいた。秩父の山の川上から護岸を変えないと戸田の水質は良くならないのかもしれない。(発話者29)
	お祭りの場所が変わっちゃって。前の場所の方がもっと、たくさんの方が参加したのに。何だか、地域のお祭りって感じがしなくなっちゃったんだよね。(発話者26)
	ペットの飼い方とかゴミ出しとかのマナーが悪い。マンションの人だと、こちらから声を掛けにくい。(発話者27)
町会の課題	地域でやろうということを町会がはたらいて他の団体や、皆の力でやらないと。全員でやって、皆が寄って来るっていうのがものすごい時間が必要なわけですよ。だから町会で曜日決めて、こうしましうって提案がありました。そういうふうにすると町自体がみんなで動くからね。それ皆が各々やってくれるだろうって期待すると、それは無理かもしれないけど。何らかの働きかけが必要。(発話者20)
	活発な活動をしているところって、マンションの人間を引き込んだりいろんな努力してるんですよ。意外と役員関係をやってくれるっていうのはマンションの人なんですよ。戸建ての人じゃなくて。(発話者22)
	とにかくね、行政に関心のない人が多すぎる。戸田は特にそう思う。(発話者26)
	マンションの人だと、町会の活動をやっていない人がいない。(発話者22)

(6) 地域コミュニティ形成における世代間分断の現状

以上の分析結果から、地域活動と地域への関心、さらに居住歴に紐づく年代にはある一定のパターンが存在していることがわかった。

<図表 25>にてその構造を示した。縦軸は地域の活

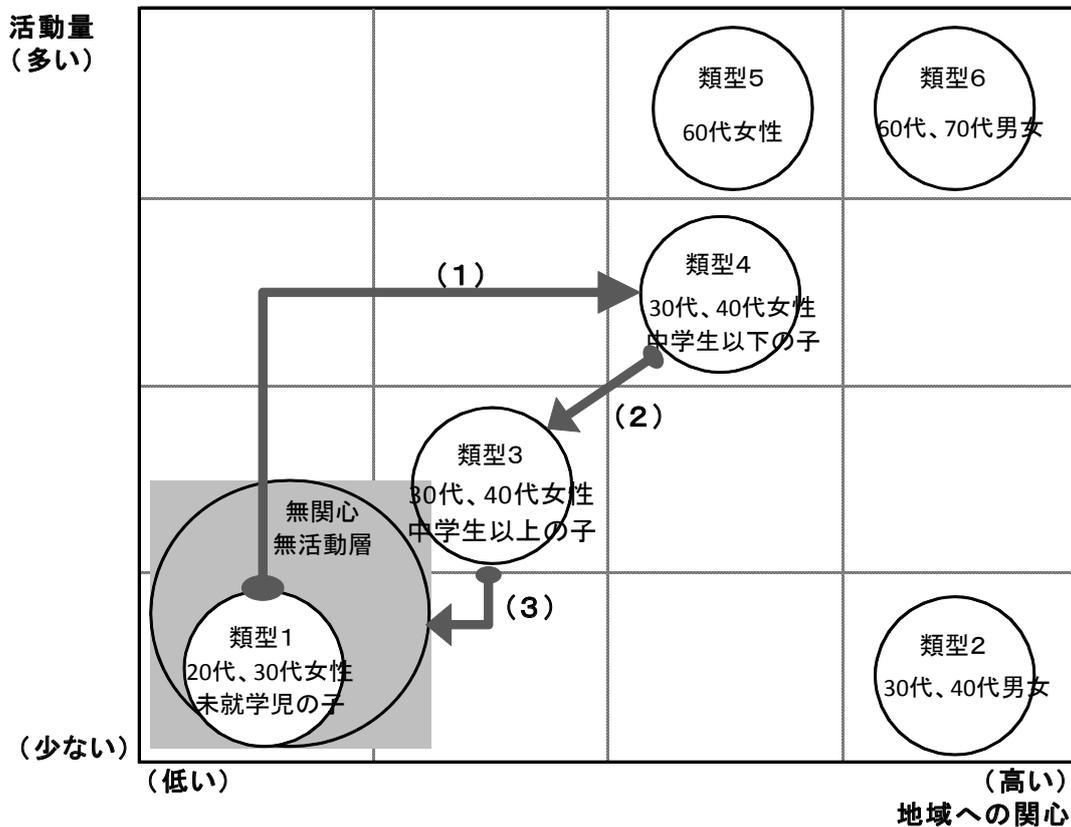
動量を示し上に行くほど活動量の多いことを示している。横軸は地域への関心度を示し右に行くほど関心が高いことを示している。各類型がどの位置にいるかを記した。さらに、各属性が年代を経るごとに移行している状態を→で示した。

これによると、活動がスムーズに移行されているのは → (1)(2) のみである。類型1は20代30代で末子に未就学児を持つ女性が多い類型であるが、最下左に寄る。この類型1は年を経ると末子の年齢が上がり、すなわち類型4に移行している(→(1))。30代、40代で中学生以下の子を持つ女性たちである。子どもの小学校活動を中心に一時期地域活動が増える構造である。さらに、年を経ると逆に地域活動はやや減り類型3に移行している(→(2))。(3)への移行については、「もっと別のことをしてみたい」(発話者23)や「子育てが一段落して、もう少し時間ができたら活動を増やそうと思っている」(発話者15)、「今はあまりイメージがない」(発話者3)などがあり、具体的に次の世代として類型5へ移行するイメージは固まっていない。将来的には、一部は活動を増やした

類型5へ移行する可能性もあるものの、活動も地域への関心も地域活動も減りグレーの位置に移行している。前述のヒアリング調査で<図表20>の将来イメージで語られているように、地域というよりはむしろ、個人の興味、関心の対象への活動を増やしたい希望を持っており、地域への関心も活動も減る傾向が見られている。

類型2については、地域への関心が高いにもかかわらず活動量が増えていない。また年齢を経て類型5または類型6へ移行するイメージを持っている人も見られなかった。「きっかけがない」(発話者16)、「誰にどこに何を言えばいいか、わからない」(発話者7)、「どうやっていいかわからない」(発話者16)といった発言が多く、将来的につながるイメージを持っていない像が浮き彫りになった。

図表 25 戸田市世代ごとによる地域活動と関心の現状



(7) 世代間が分断されている要因

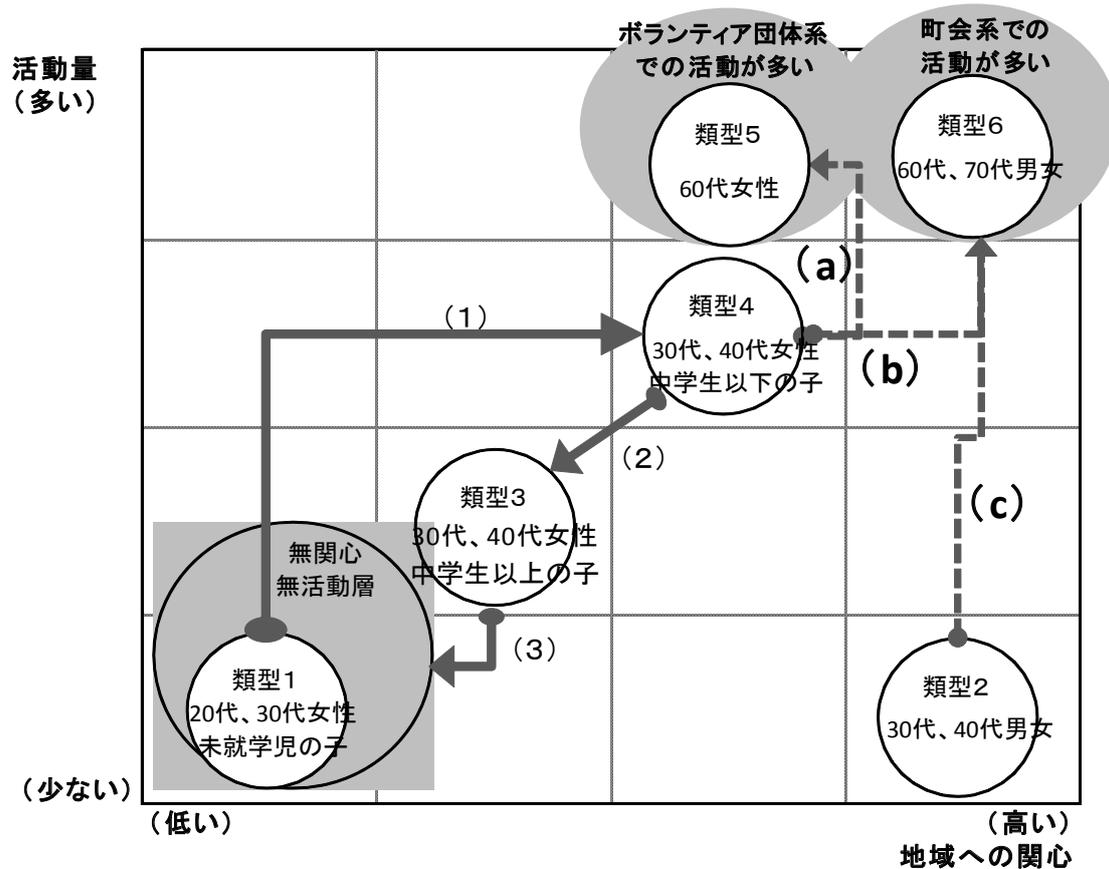
世代間で地域活動が移行されるのが望ましいとするならば、現在の戸田市では類型4から類型3に移行しているものの、活動の減少が見られている。また、類型3から次への移行と、類型2から次への移行がなされていないことがわかる。

類型2、3、4のヒアリング調査からは、地域への関心が必ずしも低い訳ではないことがわかっている。そこで、

類型4から類型5への移行(ルート(a))、あるいは類型4から類型6への移行(ルート(b))、類型2から類型6への移行(ルート(c))が生成されれば世代間の分断が減り、地域の多様な主体が活動するコミュニティの形成が推進されるであろう。<図表26>

それでは、なぜ、類型4および類型2は次の世代への移行がスムーズにいかないのでしょうか。

図表 26 世代間が分断されている属性



①情報と場所の分断

まず、類型4から類型5へ（ルート (a)）移行しない要因を考察する。類型4のこれまでの活動の主体は子どもを中心としたコミュニティである。未就学児を中心とした地域の子どもの支援センターや幼稚園・保育園が活動の拠点であり、その後小学校へと場を移行していく。特に小学校ではPTA活動へ参加せねばならない状況も多く、必然的に小学校を通じた地域の活動に参加することになる。しかしながら、一度育児期を過ぎると、地域の中で特に日常的に足を運ぶ場所がなくなってくる。そのため、これまでは小学校を通じて情報を入手してきたものが、いきなり地域情報の入手経路がなくなる状況が生まれている。一方で、「積極的に参加したい」(発話者23)や「活動を増やしたい」(発話者15) <図表20>の発言からもわかるが、社会貢献意識もある。彼らへボランティア関係への興味を聞いてみたところ、「興味はある」ものの「どこで何をしたらいいかわからない」といった声が聞かれた。

②町会への負担感

次いで、類型4から類型6へ（ルート (b)）移行しない要因としては、町会への負担感が現れている。<図表

20>「あれもこれもやらなくてはならないので、できれば自分の興味のあることを選んでできれば」(発話者4)といった発言に代表されるように、町会に対しては一部参加を望む声が多かったのが特徴的である。「やってもいいかな」でも、「若い人が顔を出すと全部押し付けられる」などの発言に象徴されている。また、「一時的なもの」(発話者11)といった発言もされており、周囲の同年代の母親たちの間では、町会=子どもが卒業したら終わるものといった意識がある。これは、これまでの母親たちの活動が子どもの卒業と同時に終了してきた姿を見ての意識形成である。

また、子どもが中学、高校へと上がるタイミングで「仕事を増やしたい」という発言が多く聞かれたことも考えられる。育児期を終え、自由になる時間が増えたことを、自分自身のキャリアや今後の仕事、収入という将来設計へと視点が移っていくことが要因であると言える。同時に、町会を中心とした活動は時間の拘束が大きいことも経験として知っているため、より自分の将来設計に重きをおく選択が増える構造となっている。

③参加契機不足

類型2は発話の中からも地域への関心の高さが伺え

る。しかしながら、地域活動が少なく類型6に移行していない。その要因は、活動が町会を中心としており負担が大きそうなことと、参加契機がないことである。戸田市のボランティアセンターが実施しているような、個人登録のボランティアも比較的平日昼間に時間のある人を対象としているため、「自分が対象ではない」という意識が強くみられ、情報も入手していない状態である。地域への関心が高い類型2は、参加契機を増やすことで地域活動量が増える可能性は高い。参加契機には、マンションと町会の固定的な関係性を見直し、より出入り自由な活動主体を用意することや、ボランティアの入口を平日日中に仕事をしている人も参加できる形態のものを増やすなどである。また、地域への関心があるため、土日を中心とした単発の勉強会や研修会、意見交換会などを用意することで、簡単で出入り自由な契機を増やすことなどが考えられる。

8. おわりに

本稿では、郊外都市として昨今若い世代を中心に人口増傾向にある埼玉県戸田市のコミュニティの実体を調査した。これまでの研究からも指摘されてきたように、特に郊外都市では、世代間や居住歴によるコミュニティ形

成がなされ、多様な主体が参加するコミュニティの形成が難しいと言われてきたが、戸田市においても同様の傾向が認められた。

また、若い世代の地域への意識が低いと指摘されてきたものの、本調査からは戸田市の若い世代や新たに移り住んだ住民たちは、必ずしも地域への関心が低いわけではない姿が浮き彫りになった。

こうした地域への関心を持つ若い世代たちを、地域活動に積極的に参加促進していくために、多世代・多目的の人が同じ場所で必然的に接点を持つ「場」作りへの期待、町会の枠組みの改善、若い世代を含め地域に関心のある人を対象とした参加契機を増やすなど、課題解決が整理できた。

特に、戸田市では平成27年9月に上戸田地域交流センターを開設し、同センターでは多世代交流の動線を生み出す設計コンセプトとなっている。同センターの開設にともない、多世代が交流する場と機会が生まれる施策となっており、今後の活動に注視したい。

今回、「場所」と「町会」、そこから発信される「情報」の3点がどのように機能しているのか、全体像を俯瞰して整理したものの、それぞれの詳細の分析までには至っていない。今後は、それぞれの「場」「町会」「情報」について、より具体的に機能と住民のその活用および参加意識を深掘りしていく必要がある。

参考文献

- NHK 放送文化研究所編 (2010)『現代日本人の意識構造 [第七版]』日本放送出版協会
 阿部真大 (2013)『地方にこもる若者たち 一都会と田舎の間に出現した新しい社会』朝日新書
 伊藤修一郎 (2007)「自治会・町内会と住民自治」論叢現代文化・公共政策 5, 85-116
 稲垣稜 (2011)『郊外世代と大都市圏』ナカニシヤ出版
 大槻知史 (2003)「生活構造論の拡張による「都市における住民と地域社会の関係」についての新たな分析枠組みの提示」政策科学 11(1), 61-72
 奥田道大 (1983)『都市コミュニティの理論』東京大学出版会
 小谷良子 (2003)「専門的主婦のネットワーク参加意識とネットワーク形成の有効性—大都市近郊のニュータウンにおける調査に基づく考察—」日本家政学会誌 54(6), P427-439
 中道實・小谷良子 (2005)「近隣自治システムの構築とその発展可能性 一大都市近郊のニュータウン調査に基づく考察—」奈良女子大学社会学論集 12, P57-98
 広井良典 (2006)『持続可能な福祉社会—「もうひとつの日本」の構想』ちくま新書
 広井良典 (2009)『コミュニティを問いなおす一つながり・都市・日本社会の未来』ちくま新書 P18 より抜粋
 三浦展 (2011)『郊外はこれからどうなる?』中公新書ラクレ
 山岸俊男 (1999)『安心社会から信頼社会へ—日本型システムの行方』中央公論社
 山縣いつ子 (2003)「ミドル世代のポテンシャル 一ミドル世代の現状と今後—」ヒューマンリソース研究所 Vol.3